A-1 水の大地

００１．祖国/タナアイル

インドネシア語のタナ・アイル（tanahair）の意味は直訳すると「水（air）の大地（tanah）」であるが、熟語としての意味は“祖国”又は“郷土”である。インドネシア国歌（→297）は『Indonesia tanah air…』で始まる。

地図で眺めるとマラッカ海峡(→032)の西側に横たわるスマトラ島はインド洋側に山脈があり、海峡側の 2/3 は一面の緑である。世界第三の島であるカリマンタン島の南半分も緑色である。地図に緑で塗られたジャングルといわれる熱帯雨林(→054)は水を蓄えた巨大なるスポンジである。

日本から6時間たって飛行機はインドネシア上空にさしかかる。スコール雲が切れると視界が広がる。ジャングルは分厚い緑の絨毯(じゅうたん)のように単調に拡がっている。時たま絨毯に裂け目のように茶褐色の河がある。太古の昔から自然のまま流れる河はあらんかぎりにくねって蛇行している。この大地をのたうち流れる河のどこに人間の営みの取っ掛かりがあるのだろうか。

陸の拡がりと海の拡がりの接する海岸近くなると《陸・島》と《河・水路・海》が混然となって入り乱れている。明確なのは陸面と水面の反射光の差だけである。この水と大地が織りなし果てしなく拡がる雄大な光景こそタナ・アイルの原点であろう。

タナ・アイルとはあるいはジャワ島の豊かな土壌になりたつ水田の風景を指すのかもしれない。降下して着陸体勢に入った飛行機の窓から水田の片隅につつましやかに散在する集落が島のように見える。

水田には待ち兼ねた雨季の雨を満々と湛え、一面の水景色の中にわずかに農家と周りの屋敷林(→059)の木立だけが浮いているようである。曇りの多い鏡をみるような水の反射を受けながら飛行機はインドネシアの空の玄関口である首都ジャカルタのスカルノ・ハッタ空港(→851)へ降下していく。

何れにせよインドネシアの風景に“水”は不可欠である。熱帯雨林気候（モンスーン）のもたらす湿潤はイン

ドネシアがタナ・アイル（水の大地）の国と言われる由縁(ゆえん)である。この湿潤の風土はインドネシア人の民族性にも少なからぬ影響を与えているに違いない。そしてまた温帯にありながらモンスーンの下のかなり似た気候風土をもつ日本(→589)との民族の間の心のきずなとなっている。

アジア大陸からオーストラリア大陸にかけての架け橋のように連なる島々からなるのがインドネシアである。インドネシアは太平洋とインド洋の間にエメラルドの輝きをもってその存在を確かなものにしている。

002. 熱帯雨林気候

インドネシアは北緯 6 度から南緯 11 度の間に位置し、赤道が国土の中央を横断する熱帯圏にある。インドネシア列島の気候は基本的に熱帯雨林気候である。ただし赤道から少し南に離れたジャワ島東部から東の小スンダ列島にかけては熱帯サバンナ気候である。

熱帯サバンナ気候では乾季と雨季が明確である。ジャワ島の西部にある首都ジャカルタは熱帯雨林気候地域にあるが、サバンナ気候の影響を受け7～9月は雨が少ない。

熱帯雨林気候は、①気温が高い、②雨が多い、③風は弱い、④四季がない、ことに要約され、その特徴は以下の通りである。

①気温は平地で 27℃前後と高く年中一定である。年中暑いが日本の都会の真夏ほど暑くはない。日本の真夏にインドネシアから帰国すると日本の暑さにげんなりとする。夏休みには駐在員の家族が避暑をかねてインドネシアへやってくる。

年間の温度格差より日夜の較差の方が大きい。しかし日夜の較差も 5～6℃の間で、夜中にそれほど下がらないのは海に囲まれているためである。

マンゴの花の咲く乾季の7月頃、乾燥した風で少し肌寒く感じることを“マンゴの花冷え”というのは日本人が見つけ出した季節感であろう。

臨海地のジャカルタよりバンドゥン(→107)のような高地の方が涼しく住みやすい。海から離れ海抜が高くなると気温は 0.5℃/100 ﾒｰﾄﾙの割合で下がる。

②年間降雨量は 2000～3000mm であるが、雨の多いカリマンタン島では 4000mm である。ちなみに大阪は 1400mm である。雨季と乾季の分れる所では雨の開始は農業と密接に関連している。雨季の開始は気まぐれであり、熱帯サバンナ気候のヌサ・トゥンガラ諸島(→210)では雨が少ないと干魃(かんばつ)になり餓死者がでる。

雨季といっても日本の梅雨(つゆ)とは様子を異にする。朝から晩までシトシト降るのではなくスコールである。30分から2時間ほどバケツをひっくり返したように降る。乾季は渇水に苦しみ、雨季は水害(→739)に苦しむ。

熱帯雨林が一度、地表が剥き出しにされると養分は篠つく雨で洗い流され、残った土壌は太陽の直射で焼きかためられコンクリートのようにラテライト化し無機物の赤土をむき出した不毛の大地となる。

③風は弱いが季節により安定しており、10 月～4 月はアジア大陸からの風でジャカルタでは《雨季》になる。反対に 4 月～10 月はオーストラリアからの風で《乾季》である。

④雨季と乾季も大まかな区分であり、ましてや四季はない。そもそもインドネシアには年の概念がなかった。インドネシアの年寄りの多くは自分の年令もあやふやであるのは年から年中似たような気候では年のとっかかりがなくないからである。その上イスラム教では陰暦(→819)のため年々の祝日(→710)が太陽暦とずれる。

毎年 8 月 17 日の独立記念日が近づくと街にポスターや看板があふれる。これは愛国心のPRもさることながら太陽暦を国民に啓蒙せねばならない役所の親切心でもある。

003. モンスーン/雨季と乾季

インドネシアは広い国土であるので気候は多様であり、赤道直下で熱帯雨林気候であるが、アジアにおける気候の特徴であるモンスーンという季節風の影響を受ける熱帯季節風気候である。春夏秋冬の季節はないが雨量の差による乾季と雨季がある。

ジャワ島ではオーストラリアから乾いた風の吹く6月から 9 月までが、乾季であり、太平洋から湿った風の吹く 12 月から 3 月までが雨季である。マルク州では乾季と雨季が逆である。

熱帯雨林気候の支配的なスマトラ島のメダンでは年間を通して高雨量であるのに対して、季節風の影響を受けるジャカルタは8月を中心に乾季で雨量が少ない。スマトラ島は雨季が長く雨が多い。同じジャワ島でも西の方ほど雨が多い、東へ行くほど雨季が短くなり雨は少なくなる。

国土の大部分は熱帯雨林気候と熱帯季節風気候であるが、バリ島以東のヌサ・トゥンガラ諸島(→210)は乾季と雨季の差がより明確な熱帯サバンナ気候に属する。

モンスーンはアジアの稲作農業のよって立つ基盤である。稲作はモンスーンの地域に広がり主食となった。インドネシアの稲作地域はモンスーンの支配下にある。農業、特に稲作にとって望ましい雨は規則正しく雨季が始まることである。

熱帯サバンナ気候の東インドネシアのヌサ・トゥンガラ列島がインドネシアで最も貧しいのは雨が少ない上、不規則だからである。

1997 年はエルニーニョ現象で降雨量が少なく、特にインドネシア東部の旱魃(かんばつ)の被害が大きかった。1998 年 2 月 2 日・スラウェシ島、2 月 9 日・フロレス島、2 月 14 日・ロンボック島で起きた暴動は盤石(ばんじゃく)と思われたスハルト政権を揺さぶり、5 月の崩壊へと繋がった。引金はモンスーンの気まぐれである。

インドネシアでは雨が降り、稲が成長する限り、誰が大統領をやっても安泰であるという一面の真実がある。1998 年の干害はスハルト大統領からワフユ(→706)は去ったことであり、天にも見捨てられたのである。

季節がないから年概念に乏しくなり暦も空しく過ぎていく。雨季と乾季といっても相対的なもので比較的降水量の多い期間が雨季である。この熱帯でも乾季と雨季には花や果物の若干の変化があり、季節らしいものが感じられる。

マラッカ海峡(→032)はモンスーンの交差するところである。古代からの帆船による交易時代はアラブ人やインド人の商人は南西モンスーンにのってマラッカ海峡(→032)を訪れた。しばらく滞在し北東モンスーンの吹き出す頃に西方へ戻って行った。

風としては南西モンスーンが優越している。マラッカ海峡地域では以西の諸国を“風上の諸国”、マラッカ海峡から東の中国までの地域を“風下の諸国”と呼んだ。ジャワ島では西風とは雨季を、東風は乾季を意味する。

004. スコールの襲来

赤道直下に横たわるインドネシアではスマトラ島、カリマンタン島などの主要な島は赤道が島の中央を貫通する。平均気温 18℃を下回る月がない。気温は年較差より日較差の方が大きい。猛暑はないが蒸し暑い。低気圧の赤道無風帯といわれ、風が一定しており朝晩の微風だけである。

日の出とともに気温は上昇し炎熱で上昇気流が激しく、午後になると積乱雲が発生してスコール[1]になる。「キラット(kilat)」と光れば稲妻(いなずま)である。これが熱帯雨林気候である。

日本の雨は初めは小降りでだんだんと本降りになる。インドネシアでもこの手の降り方はある。しかしスコールはパラパラと豆を撒くような音とともに急に降り出す。傘を持っていても拡げる間もないくらいである。仮に傘をさしたところで地面を勢いよく跳ね上がる雨で下から濡れる。雨は「フジャン(hujan)」と降る。滝の下のような雨の勢いでは傘が壊れそうになる。

結婚式招待客接待の宴会などは屋外でのテントの下で行われている。スコールがくるとテントでは当面の雨は防げるが、次第に雨がふきこむ。雨が溜まりだすとその重みで屋根は大きくたわむ。雨の音が騒々しく、雷鳴の音で話もできない。止むのを泰然として待つだけである。

日本からの賓客がインドネシアで講演を行った。話し終わると万雷の拍手が鳴り止まなかった。講演者は満足げであったが、あまり拍手が続くのでようやく不審に思い見回してトタン屋根を打つスコールだと気がついた。

田舎の一本道でスコールに会うこともある。天空の黒雲の広がりは自動車のスピードにまさる。黒雲につかまると水中を行くようになる。フロント窓に打ちつける雨は多すぎてワイパーは有っても役にたたず前が見えない。雨宿りする適当な場所もない。雷鳴が轟き稲妻が走ればいささかの信心も芽生える。

スコールとは雨雲の下だけ降る。その雨雲は一面に拡がるのではない。黒雲が軍団の行進のように天空を横切る、その下はスコールであるが、黒雲の外側は晴れている。その境界が明確で小糠雨(こぬかあめ)というような中間領域がない。例えば玄関から出ると雨だが同じ家の裏口に回ると晴れである。自動車道路の片側はドシャ降りだが、反対車線は日が射している。

英国の作家モームが東南アジアに取材した短編『雨』では、スコールの騒音と蒸し暑さが人々の神経を高ぶらせ理性をかき乱し、一人の宣教師を破滅させる。

スコールの中を悠々と歩いている人がいる。大粒の雨で痛くないかと思うが、あるいは天然シャワーのつもりかもしれない。雨が降り出せば急いで走り出すのは日本人の習性である。インドネシアでは誰も走らない。走ったところでずぶ濡れになるのは変わりがないから走るだけ無駄である。熱帯の暮しが長くなれば雨が降ったくらいで走るのはみっともないことが分かるようになる。

スコールがジャワの大地を洗いゐる　北端辰昭著「珊瑚礁」

005. 雨商売

スコールにまともに傘をさせば壊れるだけだから雨傘はそれほど実用品ではない。むしろ影のない広場で営業する屋台(→858)などでは日除けに雨傘を使用している。

雨に備えて傘を所持する人はいないので傘の商売がある。バス降り場や駐車場からビルの入り口までの短い距離は傘がほしい。その時、たむろしている子供が傘を差し掛けてくれる。子供の方はびしょ濡れで裸足(はだし)である。当然のことながら商売であるから何がしの代金は払わねばならない。「アナック・パユン(anak

[1]インドネシアでは雨はスコールのような降り方であるので雨はすべてフジャン(hujan)であり、スコールに該当するインドネシア語はないようである。スコール(squall)の語源は欧米の気象用語である。

payung=傘小僧）」または「オジェック・パユン（ojek payung=傘の運び屋）」という。

雨が上がれば水溜りができる。一般に車の通る道路は盛り土で高くなっており、基本的には排水は道の両側に流れる仕組みである。都会ではえてしてそこには貧しいカンプン(→728)がある。

道路の水はけの悪い浸水個所は決まっている。30cm も溜まればエンコする車もでてくる。その時、現れるのが車の後押し屋である。子供の小遣い稼ぎのようであるが、彼らの家庭の生計に不可欠な収入であろう。いやしくも車を乗るような人はそんな所で値切ったりはしない。インドネシアで座高の高い四輪駆動に人気があるのは浸水対策である。

後押しでどうにもならない程、水が溜まればたちまち交通渋滞である。今度は食べ物屋の登場である。新聞売り、煙草売りも稼ぎがよくなる。

雨を降らせない商売もある。雨季には午後になるとスコールの確率は高いが100％降るわけではない。時間も不定期である。従って雨季といえども屋外の行事は予定される。また雨雲がどこを通るかは気まぐれである。しかし式の時間帯は雨が降るとまずい。こういう時は雨雲を追い払えばよい。これを行うのはドゥクン(→866)という呪術師(じゅじゅつし)である。雨に特化したドゥクンを「パワン・ウジャン[2]」という。

ドゥクンは依頼主から依頼を受けると準備に入る。水断ちを行い、マンディ(→803)も断つ。食べるものも乾燥したものである。そして迎えた当日は儀式を行い、念力で催しが終わるまで雨雲を退散させる。1994 年のAPEC会議は“雨の町”として知られるボゴール(→113)で行われた。この際は大統領お抱えの祈祷師の念力での雨は避けられた。

さてインドネシアでは日本人もインドネシアの慣習に従っている。例えば大事な客を集めてゴルフ・コンペを催す際はドゥクンの登板となる。ゴルフ場のように広いとドゥクンも数名の世話になる。高名のドゥクンがゴルフ場の各々の端に陣取り雨雲を近づけないように祈る。通常はこれで無事コンペは終了する。

絶対に降らないかといえばそうでもない。やはり降ることもある。これはドゥクンの力足らずというよりは依頼主側に油断があった、ということで仮に雨が降ってもドゥクンのせいではない。従って損害賠償を求められることもない。この点は日本の安全祈願祭と同じである。神主が祝詞(のりと)を唱えおはらいをする。事故が起きても神主は免責されている。

006. マングローブ

海岸や河口の泥地に生える熱帯特有の多様多種な植物から成る植生が“マングローブ”である。従ってマングローブ[3]という植物固体名は存在しない。マングローブの植物は塩分をこのみ、熱帯および亜熱帯の河口、入江などの海水に群をなしている。樹皮の中側が赤い種類が多いので中国語では“紅樹”ともいう。

満潮の時は穏やかな水面に緑が浮かぶ。引潮になると蛸の足のようにもつれた支柱根や気根が現われる。地盤が泥のため支柱が必要である。

水の上に生い茂った枝の実から落ちた種子が直下の泥に突き刺さり、そこからさらにまた樹が成長する。このようにマングローブは絶えず自ら浅瀬を造成しながら海へ海へと伸びていく。潮と泥の混じった微かな異

[2]パワン・フジャン（PawangHujan）はタバコ産業で収穫時期に雨を避けるのが本来の業務であるらしい。出所 Joglosemar

[3]マングローブ（mangrove）の語源はスペイン語であるが国際共通用語となっている。マングローブを意味するインドネシア語はバカウ（bakau）である。

臭がある。陸にとり残されたマングローブは、やがて土に埋もれ泥炭となる。こうしたマングローブの土地造成作用のために、東南アジア多島海の島々の海岸線の変化が激しい。

例えば16～17世紀に香料貿易で賑わったバンテン王国(→261)の港は今ではマングローブで港は埋まり、うら寂しい漁村になっている。

マングローブは日本の河原の葦と同じで遠目に見た目には美しいが、実際その中に入ると枝と根がからみ、足元はじくじくした湿地で両生類や爬虫類が跋扈(ばっこ)する所である。従ってマングローブへは海から船でしか近づけない。

そもそもマングローブは《海》か《陸》か判然としないところであるが、生物も水の中から木の枝の昆虫を打ち落とす“鉄砲魚”や、陸で餌を探し木に登る“木登り魚”（木登りは誇張らしい）など珍しいものも多い。何れにしろ、生物の宝庫としてエビ、カニ、魚、貝に不可欠な繁殖地である。

かつてはマングローブの樹は硬いので木炭に使用されるぐらいで人もあまり近づかなかった。一昔前の日本の暖房は木炭が主流であったが、石油からさらに電気に代わり木炭の生産量も減った。しかし最近バベーキュウーの普及にともない木炭が使われインドネシア産が輸入されている。インドネシア産の“備長(びんちょう)炭”もある。

マングローブは木炭以外にチップ材の原料として輸出されるようになった。また輸出用のエビ養魚池(→553)造成のためマングローブの伐採が進んでいる。今やジャングルのみならずマングローブも消滅の危機に立っており、地球規模の環境破壊問題[4]に取り上げられている。

東南アジア島嶼部の植生の大きな特徴は『マングローブ』であることを指摘してマレー半島からインドネシア・フィリッピンにかけての実地見聞からマレー系民族の社会を“マングローブ社会”と命名した鶴見良行著『マングローブの沼地にて』の好著がある。

マングローブはアフリカやアメリカの熱帯地方でも見られる。しかし東南アジア島嶼部では海岸線が長いだけマングローブはより顕著な存在である。

007. スワンプの拡がり

マングローブは海からの奥行きはせいぜい数キロメートルであり、そこから先の沼地は英語でスワンプ（swamp）といわれる。パヤ(paya)というインドネシア語があるが、英語が一般化している。中には海から数百キロメートルにも及ぶスワンプがあり、中カリマンタン州の州都のパランカラヤ(→190)のように海岸から 300 km入っても大湿地の中というところがある。

スワンプは必ずしも一面の沼ではなく低い樹からなるジャングルである。海に近いスワンプは毎日貯水と排水を繰り返す。内陸部に入るほど凹地には流れることのない水たまりになっている。雨季には貯水が深くなる。

このスワンプの農業開発には、一見、稲作が適しているように考えられるが水に問題がある。黒く澱んだ水は酸性が強い。また、このような所の土壌は湿地のため植物が未分解のまま炭化した泥炭層が数メートルの厚さにも達する。

抜本的対策として溝を作り排水をすればよいが、そうすると泥炭が急速に分解して地盤沈下を引き起こす。

[4]2004 年 12 月のスマトラ島沖大地震に伴う津波被害においてもマングローブがあれば消波機能が働き、被害の拡大を防止したものとみられる。

排水の後はさらに酸性土壌を改良しなければ農地にならないという厄介な土地である。

このような土地でも何とか利用しようと川の縁から人のとっかかりが始まるが、漁業などとの兼業農家でないと生活が苦しいようである。しばらくすると人もどこかに去っている。感潮帯では潮の干満を利用した潮汐灌漑(→546)で稲作のための水田が開発されつつあるが一部の地域に過ぎない。

インドネシアの広大な土地はこのような低湿地である。世界地図を広げて緑で示される平野が農業に適しているのは温帯だけである。赤道直下の地図で緑色の部分は湿地マークのついた不毛の大地として放置されてきた。

熱帯地方では地図で茶色の高地の方が気温も低く住みやすい。その平地に人間が下りてきたのは、大規模な土木技術が開発され、その技術を駆使しうる強力な政治権力が存在するようになって以来のことである。

政治権力の歴史が古いジャワ島ではスワンプであった平地のほとんどは開発しつくされた。これはスワンプの規模がもとから小さく土壌も肥沃であったこともあるが、人口圧力からの執念でもあろう。

スマトラ島の東岸、カリマンタン島の南岸、イリアン(ニューギニア)島南岸のスワンプはほとんど手がつけられず放置されている。その面積は日本の総面積に近い。スハルト政権による中カリマンタン州の泥炭地の開発計画(→546)は頓挫したままである。

スワンプ開発のため最も期待されているのはサゴヤシ(→770)である。サゴヤシはヤシ科の植物であるが澱粉が採れる。今のところスワンプで成育可能で澱粉食料の供給源となりうる唯一の植物である。

008. コーヒー色の河

島国インドネシアには東南アジアの大陸部のメコン河、メナム河、イラワジ河というような数千 km に及び数カ国を流れるという超大河はない。しかしカリマンタン島のカプアス河(→188)、バリト河(→192)、マハカム河(→194)等は大河である。スマトラ島ではムシ河(→101)、バタンハリ河(→100)、インドラギリ河、カンパル河(→090)であり、イリアン(ニューギニア)島ではメンベラモ河、ディグル河(→242)は水量も多く大河である。

山を抜け出た河は高低差のほとんどない平地を蛇行して流れる。飛行機から見る蛇行の有様はインドネシアの最初の風景として忘れがたい心象となって残る。蛇行する河は水の神である蛇神ナガ(→953)の根源であろう。

熱帯の河の水は土の色で濁っておりコーヒー色である。茶濁の原因は次の要因が考えられる。①土の比重が軽いので沈殿しない、②雨が土を洗い流すような降り方をする、③蛇行する河は絶えず土を侵食する。削られ大地が赤い河となって真っ青の海に注ぐ光景を機上から見て大地の“赤い涙”と言った人がいた。

蛇行する河は河岸の土を侵食し蛇行を増殖していく。たまたま川の橋を通りかかった際に川の湾曲部で土が崩れて 5～6mの木が根こそぎ川に流されたのを目撃したことがある。洪水でなく雨も降らない晴天の日であっただけに印象的な光景であった。

『ブンガワン・ソロ(→985)』はソロ川の歌である。日本語の歌詞では『清き流れ･･･』となっているが、実際のソロ川は茶色く濁った流れである。インドネシアの子供の描く川の絵は茶色である。

熱帯では澄んだ水の流れる川がトバ湖周辺やバリ島にある。火山性土壌を伏流してきた水で清水のわき出る泉も多い。こういう所では観光バスが止まり、ガイドが写真を撮れと催促する。河の流れる距離の短いスラ

ウェシ島では川の水がきれいである。水が濁るのは平野に出てからである。ジャワ島ではタワンマングの滝[5]が観光名所である。

平地を流れる河は交通に使用される。カリマンタン島では現在でも河川交通(→855)が最重要の交通手段である。河があっても橋が架けられることはない。車より船が優先である。ポンティアナック(→189)、バンジャルマシン(→192)、サマリンダ(→194)の河港にはバスターミナルのごとく発着する船で賑わう。

河の合流点あるいは三角州に分岐する手前の河口の要所に交易の町が発達し、その地方の中心地となっている。河の要衝から上流に支配圏がおよぶのが東南アジアの政治構造の原点であり、スマトラ島やカリマンタン島の河川地政学である。

ところで、インドネシア語の「pergi ke sungai」の直訳は『川へ行く』の意味であるが、熟語として『便所に行く』の意味になる。日本語の“厠(かわや)”の語源が川屋であるように、水洗便所の起源は万国共通“川”であるらしい。川でマンディ(→803)も行うがその場合は河原に穴を掘り、そこに浸透して溜まる“きれいな”水を使う。マンディ中に下の用事も済ませる。これも水が濁っているから可能である。

009. 冷気への憧れ

東南アジアの最高峰はカリマンタン(ボルネオ)島のキナバル山(4101m)であり、所在地はマレーシアのサバ州である。インドネシアの最高峰は 5039m のジャヤ峰(→240)である。ジャヤ峰の方がキナバル山より高いにもかかわらず東南アジアの最高峰でないのは所在地がイリアン(ニューギニア)島だからである。

ジャヤ峰の高さになると赤道直下(赤道の 100km 北)と言えど“雪”が降る。しかも万年雪になるから氷河もある。「インドネシアに雪が降るか？」というのはクイズとして難問と思うが、学校教育を受けたインドネシア人は「ada！(有るの意味)」と誇りをもって答える。

ちなみにインドネシア人には雪への憧憬がある。大阪在留のインドネシア人が冬に北陸へ家族旅行をした。寒いのに家族そろって何用かと尋ねると雪を見るためにだけのことである。雪景色の話しぶりからその印象は強烈であったらしい。札幌の雪祭りもいいが寒すぎるので、汽車の窓からの雪景色だけでいいとのことである。ちなみに札幌の雪祭りでインドネシア留学生の作品が賞を取ったことがある。

一昔前、加藤大介、伴淳三郎出演の『南の島に雪がふる』という芝居が評判になったことがある。ニューギニア戦線のマノクワリで本隊から取り残された日本兵の集団が無聊(ぶりょう)を慰めるため演芸会を行う。その際に紙か何かで雪の降るシーンを演出し、東北出身の兵は雪に感涙した。熱帯に雪とは感傷の世界である。

インドネシアは標高の高い火山が海岸に近い。海に面する大都市の後背地の山岳の高原には避暑地がある。ジャカルタにプンチャック(→112)、スラバヤにはトゥレテス(→143)、メダンにはブラスタギ(→086)など何れも1～2時間の距離である。

高地の気温は幾分低いが、高原をふく風は涼しいため体感温度は下がる。オランダ人の残した瀟洒(しょうしゃ)な別荘にはマントルピースがある。夜は冷えるがマントルピースが要るほど寒くなることはないと思うが、実用というよりは単なる精神安定剤であろう。

そう言えば少しでも涼しいとインドネシアの富裕階級夫人は寒い寒いと大騒ぎをして着る機会の少ない毛

[5]タワンマング(Tawangmangu)の滝はラウ山中にある有料公園であり、落差 81m の滝はすばらしい。観光客はインドネシア人が多く外国人観光客は少ない。外国人観光客にとって中部ジャワでは滝よりも遺跡めぐりに忙しいからであろう。(編者註:タワンマングは中部ジャワ州にある町で東武ジャワ州に面している高原の町である)

皮のコートを着用して用もないのに外出したがる。

滝があればどんな小さな滝でも名所になる。水が清流であるとインドネシア人はうっとりとして眺めている。見ているだけで涼しくなる。色は水色が好まれる。

《パナス panas＝暑い》と《ディンギン dingin＝寒い》は気象用語であるが、インドネシア語では社会の状態を表現する用語でもある。社会の「panas」とは暴動の生じる基盤である。いうまでもなく「dingin」が望まれる。ご飯も炊き立ての熱々は避ける。化粧品も冷たい。頭痛にコメカミに米粒をつけるのは熱を吸い取る呪(まじな)いである。

スハルト大統領の強権体制の下でインドネシアは永らく「dingin」が続いてきた。しかし 1998 年 5 月事件の爆発でスハルト大統領の退任を余儀なくさせた。その後、民族対立、宗教対立で社会は「panas」になった。

010. 聖なる水

水は生命の源泉である。宗教において水は重要な役割を果たす。水のない宗教儀式はない。キリスト教では洗礼の儀式をへてキリスト教徒になる。日本の神社仏閣にもお参りの前に水で清める。二月堂のお水取りは日本人の水への原始信仰の名残であろう。

イスラム教徒はお祈りの前に口、手、足を水で清める。イスラム教徒にとって最も大事な水は聖地メッカのカーバー神殿の地下に湧き出るザムザムの水である。メッカ巡礼(→816)の際に聖地から持って帰った水は末期の水として保存される。

クラトン(→121)でのスラマタン(→705)の儀式では出席者に聖水が振り掛けられ、持参の水入れに聖水を持ち帰る。田畑に少しずつ注ぎ豊穣を祈る。

ジャワ人の結婚式にはウパチャラマンディ[6]という沐浴(もくよく)の儀式がある。式の前日花嫁と花婿のそれぞれの家で7箇所の縁起の良い場所からの水で沐浴する。

バリのヒンドゥー教儀式は、①供物を供える、②聖水で清める、③呪文を唱える、の3要素からなる。その中で水は重要であるというより水そのものが宗教である。バリは自らの宗教を「聖水の宗教（AgamaTirtal）」という。聖水は汚れを落とし災いから人々を解放するシンボルであり、神と人を結び付ける媒体である。

ヒンドゥー教のあらゆる儀式において聖水は使用される。最も重要な儀式である火葬(→651)の際にも死体が焼けにくくなるくらい聖水がふりかけられる。

バリでの重要なお祭りの聖水はアグン山(→179)の山頂近くの湧水[7]でなければならない。マス・アグンの泉はかなりの難所にある。アグン山の水脈はガンジス河に通じている、とバリ人は信じている。通常の儀式に使用する聖水は村の近くのコンコンと地下水のわき出る泉である。

聖水は頭上で運ばなれければならない。ガボガン(→931)ほど絵にならないが、儀式の最初は水運びの行列である。祭の供え物の料理には聖水が使用されねばならない。聖水はココヤシの殻のような伝統の容器で取り扱われる。手続きを経ればコカコーラの瓶でもよい。

聖水は清められて聖水になる。その清めを行うのはブダンダ(→869)という最高司祭である。聖水を酌む、参拝者や供え物に聖水をかけるという行為はバリでは余りにも多い日常的行為であるのでプマンクという身

---

[6]ウパチャラ・マンディの花嫁は両親に許しをこう挨拶をする。両親は花びらの浮かんだ水をムラティの花で編んだ沐浴着の花嫁にかける。両親の次に7人の女性の先輩が水をかける。出所柳沢有紀夫編『アジアのツボ東南アジア』

[7]バリの村人がアグン山の聖水を得るための登山に同行した体験談がある。出所皆川厚一著『ガムラン武者修業行』

分の低い平民の僧侶が担当する。

Tirta Empul

バリ島の中央にタンパクシリン（Tampaksiring）に水を祭る「ティルタ・エンプル（Tirta Empul）寺院」がある。水の力で魔王を退治したという伝説がある。寺院に隣接する蓮池の底からわきだす清水はアムルタ（amertha）という不老不死の霊薬の力を持つと信じられている。この水は特別の清めの儀式[8]に使用される。

スカルノ大統領はタンパクシリンの泉を見下ろす丘に大統領官邸の別荘があり在任中にしばしば訪れた。水の持つ永遠の若さにあやかろうとしたが、実は水浴する娘を丘の上から眺めることによる効験があらたかであったらしい。観光客が多くなったので水浴は禁止されている。

[8]バリ全体の大祭であるガルンガンはタンパクシリンに詣でて聖水で清める。その際はタンパクシリンが最も賑わう。